

# 紀 要

第 6 号

---

---

## 目 次

粟津湖底遺跡出土の木質遺物……………	(伊 東 隆 夫)
弥生時代の木偶と祭祀 —中主町湯ノ部遺跡出土木偶から—……………	(濱 修)
県内における磨製石斧の消滅年代について……………	(井 上 洋 介)
土師器甕の変遷とその背景 —近江型土師器成立への諸段階—……………	(大 崎 哲 人)
草津市笠山古窯出土遺物の紹介 —笠山古窯の位置づけをめぐって・瀬田丘陵生産遺跡群の検討— ……………	(畑 中 英 二)
倭京の実像 —飛鳥地域における京の成立過程—……………	(相 原 嘉 之)
近江八幡市大手前・御所内遺跡出土の銅印をめぐって……………	(田 路 正 幸)
将棋史研究ノート(3) —王将と玉将—……………	(三 宅 弘)
近江国坂田荘の開発(中) —長浜市大東遺跡を中心として—……………	(北 村 圭 弘)
滋賀県八日市・永源寺地域における蔵王産花崗岩製中世石造美術の分布 —八日市市・永源寺町石造美術石材分布調査概要—……………	(兼 康 保 明)
滋賀県出土の埴輪資料集(その3)……………	(稲 垣 正 宏)

---

---

1993. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

# 弥生時代の木偶と祭祀

## — 中主町湯ノ部遺跡出土木偶から —

濱 修

### 1. はじめに

近年の発掘調査の増加により、弥生時代の人々の生活や暮らしぶりが、徐々にではあるが明らかになってきた。大型の掘立柱建物の柱穴からその上部構造が復元され、出土した壺や甕から当時の社会生活そのものの解明が進んでいる。しかし、弥生人の精神生活に関する考古資料の出土は少なく、当時の人々の信仰や宗教、祭りの形態を理解するには困難が多い。

今回、湯ノ部遺跡<sup>(1)</sup>から弥生時代の木偶が4体出土した。これに先んじて草津市の烏丸崎遺跡<sup>(2)</sup>で1体の木偶が出土した。滋賀県内ではすでに大中の湖南遺跡<sup>(3)</sup>から2体の木偶が出土している。全国から出土している弥生時代の木偶10例のうち滋賀県内で7例が出土していることは、弥生時代の祭祀を考えるうえで大きな糸口が与えられたものと思われる。

今回出土した湯ノ部遺跡の木偶の資料的価値の大きさを考えて今回資料紹介するとともに、滋賀県内の出土例から弥生時代の祭祀について考えてみたい。

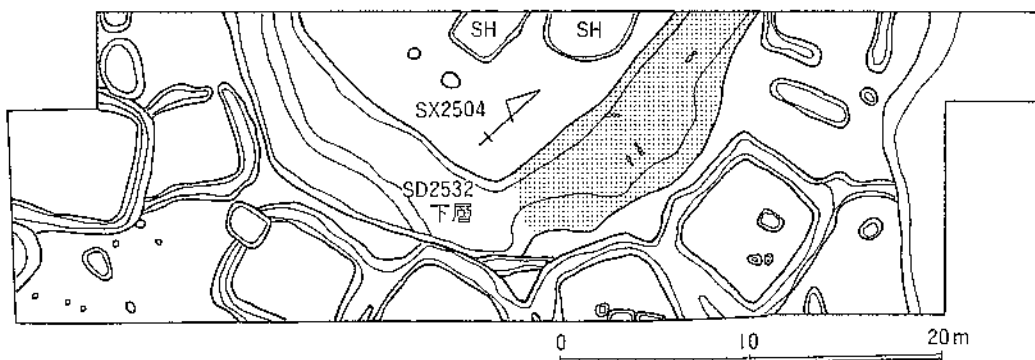
### 2. 湯ノ部遺跡の概要と遺構の変遷

湯ノ部遺跡は中主町西河原・八夫地域の水田地帯に位置する。現在の水田の畔は野洲郡条里のN33°Eに平行し、この地割りは中世まで遡る。しかし、奈良時代になると南北方向の溝や掘立柱建物が出現する。1991年度の発掘調査では、南北方向の溝から天武4年(676)の年紀を記す文書木簡が出土した。

この飛鳥時代から奈良時代にかけての南北地割の遺構面の下層には、弥生時代から古墳時代にかけての遺構群が埋没している。とくに、弥生時代中期から後期にかけては方形周溝墓群が形成され、大規模な墓域の存在が明らかになってきた。

弥生時代の方形周溝墓は湯ノ部遺跡の調査に先立って行なった小比江遺跡の発掘調査で弥生時代の中期前半の時期の周溝墓と後期の周溝墓が検出された。そして約200mの空白地帯を挟んで湯ノ部遺跡になると弥生時代中期後半の方形周溝墓3基と、後期後半の方形周溝墓が7基検出された。この墓域を形成した集落はまだ見つかっていないが周辺に存在することが予想される。

湯ノ部遺跡では遺跡の南端から弥生時代中期のやや大型の方形周溝墓が3基出現する。いずれも主体部は検出できていないが、その1基の周溝からは水差、広口壺、鉄剣型磨製石剣が出土している。また、他の1基の周溝墓のマウンドからも磨製石剣の破片が1点出土している。この周溝墓は埋没した微高地上に帯状に立地している。この微高地の両端は低湿地で居住には不適当な地域を選んで墓域にしている様子が伺われる。さらにこれらの墓域より低地は水田に利用してい



第1図 T25下層遺構

たものと思われる。遺跡の概要は集落、墓域、水田といった立地環境が復元できる。

この中期後半の周溝墓から約100m離れて北東方向に後期後半の周溝墓群が約7基検出された。この周溝墓は1辺が約6mと小型で周溝を共有している。また、主体部は検出されなかったが、周溝の各コーナーからは1～2個の供献土器が出土した。さらにこの周溝墓群の最大の特徴は図1に見られるように溝を挟んで1辺約20mの方形の区画SX2504に取り付くように形成されている点である。

この溝SD2532から出土する遺物は大きく2時期の遺物が出土する。上層からは、周辺の方形周溝墓群と同時期の弥生時代後期の土器群が出土し、下層からは弥生時代中期後半の土器群が出土する。今回出土した4体の木偶はこの方形区画をめぐる周溝の、下層の弥生時代中期後半の土器群とともに出土したものである。

この時期の方形周溝墓は約120m南東の方向のT22トレンチで3基検出している。

ここで、これまで見つかっている弥生時代の遺構とその変遷について概要をまとめてみたい。

弥生時代前期の遺構は、木偶が出土した溝を持つ方形区画のSX2504から円形のプランの竪穴式住居が1棟と土壇が2基見つかっている。

弥生時代中期になると、小比江遺跡で中期前半の方形周溝墓17基が存在し、湯ノ部遺跡では中期後半の遺構として木偶が出土した溝の下層がこの時期で、これに伴う土壇が2基後期の方形周溝墓の下層から出土している。また、22トレンチで中期後半の周溝墓が3基存在する。

後期になると木偶が出土した溝の上層にこの時期の土器群があり、その溝を取り巻いて方形周溝墓がみられる。また、この方形区画の高まりに竪穴式住居が1棟検出されている。小比江遺跡では方形周溝墓が3基のほか木棺墓が出土している。

	前期	中期	後期
住居跡	——	-----	——
祭場?		——	
墓	——	-----	——
水田		-----	

このように住居跡は前期と後期に単独で出現するが、日常生活用の住居というよりも一時的なものと思われる。墓は中期初頭と中期末、後期の後半とにとびとびに出現する。これは集落跡との関連で考えるべきである。水田については明確な遺構は検出できていないが、住居跡、墓域に利用できない低湿地域はおそらく水田として利用していたものと思われる。地形的にも埋没している微高地上に点々と方形周溝墓などの遺構が出現し、その間に遺構の無い低地がある。これらの土壌にはグライ化した水田土壌中で検出される珪酸鉄の白い結晶が層になって見られた。

### 3. 木偶出土の溝と遺物

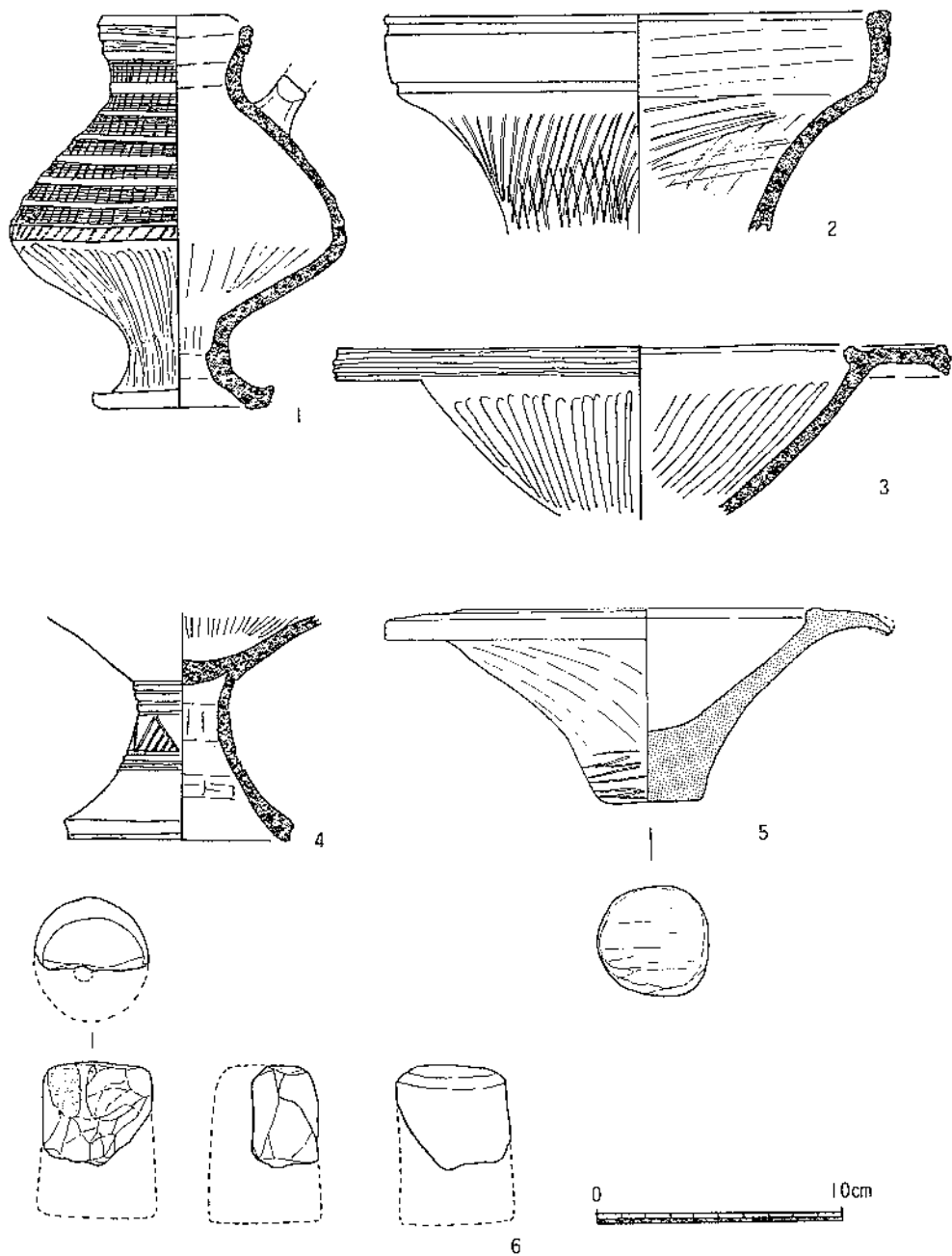
今回出土した4体の木偶はT25トレンチの方形区画SX2504の溝SD2532下層から出土した。この溝は幅約6m、深さ約80mで方形区画を周溝状にめぐっている。遺構の全体は検出できず、この溝が集落の環濠になるのか、巨大な方形周溝墓の周溝になるのか、祭場の周溝になるか不明だが、溝はコーナーを持ちその部分はやや高くなり両サイドに向かって深くなる。

出土遺物では溝の上層は弥生時代後期後半の土器群で、溝の全域からほぼ満遍なく出土している。その中に2ヵ所の土器だまりがあり、1つは溝の外側から廃棄された状況が伺われた。全体から集中して出土した状況は集落と墓域を区画する周溝の様相を示していた。

下層の遺物出土状況は特徴的である。まず、出土地点が第1図のトーンの部分からほとんどの遺物が大量に出土している。また、出土した遺物の多くは土器類で、壺や高坏、器台が多い。さらに木偶のほか、木製の高坏、板材等木製品の多いことも特徴的である。また、炭化した米も出土した。

出土した主なものを第2図に示した。1は水差のほぼ完形品で口縁部に2本の凹線文、体部にはやや荒い籬状文、体部下半は磨きを施す。2は広口壺の口縁部で2本の凹線文を施す。3は高坏の坏部で口縁端部が外に延びるタイプ。4は高坏の脚部で鋸歯文を線刻する。これらの土器は概ね中期後半のやや古い時期であろう。5は木製の高坏の坏部で器形は4の高坏と似ているが、口縁端部が垂下するかは不明。脚部はなく、坏部のみで終了しているように底部は面をなす。坏部の口縁を復元するとやや楕円形になるが、ろくろ成形でなく割り抜いたために変形したものであろうか。内面は炭化したように煤けているが器面調整のために煤けさしたものであろう。6は土製品の破片で色調は赤褐色。荒い胎土で2次焼成を受けている。内面のトーン部分は炭化している。中央部分には直径約5mmの円孔が復元できる。愛知県朝日遺跡<sup>(4)</sup>で出土している小銅鐸型土製品に似るが、小銅鐸の鋳型の中子かもしれない。

溝SD2534に囲まれた高まりSX2504には2棟の住居跡と土壌が見つかった。住居跡の1つは弥生時代前期のもので、円形プランで壁溝が残る。消失家屋の様で焼けた垂木が床面全体から見つ



第2図 SD2532下層出土遺物

かった。また2個の土壙が隣接して見つかった。もう1つの住居跡は弥生時代の後期の時期で方形プランである。この方形に区画された高まりSX2504は、当初弥生時代中期の方形周溝墓のマウンドと考えたが、墓の主体部もなく周溝内の多くの遺物出土状況から見ても、中期のみ墓として使われ前期・後期には住居域とするには不自然であり、現時点では集落のはずれの、墓域と集落の境界に位置する神聖な地域ではないかと考える。

#### 4. 木偶の形態と特徴

湯ノ部遺跡からは合計4体の木偶が出土した。法量は以下の通りである。

	全長	最大幅	最大厚
1号木偶	19.2cm	6.0cm	3.1cm
2号木偶	35.0cm	6.3cm	3.8cm
3号木偶	57.4cm	7.4cm	3.2cm
4号木偶	60.5cm	6.7cm	3.0cm

4体の木偶に共通する点は、幅と厚さはほぼ近似値であるが、長さについてはバラツキが見られることである。

形態の特徴は以下の通りである。

1号木偶はヒノキの一木作りで、頭部、胴部、腰部、脚部とが明確に作り出されている。正面は右肩から左脇腹にかけて浅いタスキ状の彫り込みがある。背中の中央部には腹に向けて盲孔を開ける。顔面は眼と鼻、口がわずかに残る。この木偶の最大の特徴は頭頂部、肩、腰部に赤い彩色を施す。この赤い彩色は当初は体の全体に彩色されていたものと思われる。また、肩から腰のタスキ状の彫り込みは、古墳時代の埴輪に見られる巫女の像<sup>(7)</sup>と共通することから、この木偶も巫女を象徴しているかもしれない。また、頭部の平面形が銅鐸絵画に見る女性像<sup>(8)</sup>の様に三角形である点からもこの木偶は女性像であろう。

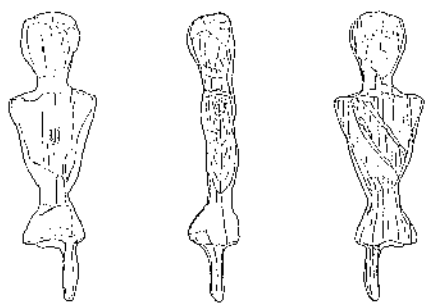
2号木偶は頭部、胴部、腰部からなり末端部は平面形で未調整である。基部の左辺部には表と裏から約1.5～2.0cmの盲孔を開ける。顔は目、口が陰刻される。ヒノキの一木作りで断面形は四角になる。1号木偶が女性像とすると、2号木偶は腰部の盲孔や、1号木偶と並んで出土したことからも男性像と思われる。

3号木偶は頭部と、胴部・腰部が連続して作りだされる。末端部は削って杭の様に鋭角に尖らせる。断面形は四角形になる。顔は左眼が陰刻され、右目は焼き箆手を当てられた様に焼き窪んでいる。

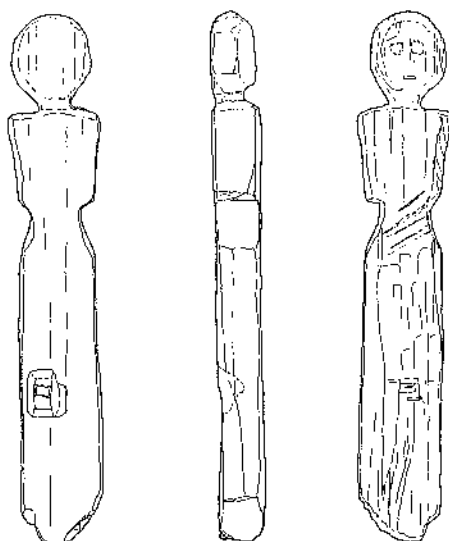
4号木偶は頭部、胴部、腰部と分離し腰は細く締まっている。断面は方形で板材を加工したものの。顔は眉、目、口が掘り込まれ鼻が削りだされ、端正なマスクである。この木偶の最大の特徴は体の中央部分の腰部に約1.5cmの貫通孔を開け、その孔に長さ約5cmの棒を挿入した状態で出土した点である。挿入された棒は当初鳥型木製品の様に長い棒の先に突き刺して掲げたものかとも思われたが、大中の湖南遺跡の小型の木偶が同様に穿孔されている点から男性のシンボルと考えたほうがより妥当性がある。

4号木偶が男性とすると、3・4号木偶は出土状態は一对で出土していないが、その機能から考えると男女一对として考えても良いであろう。

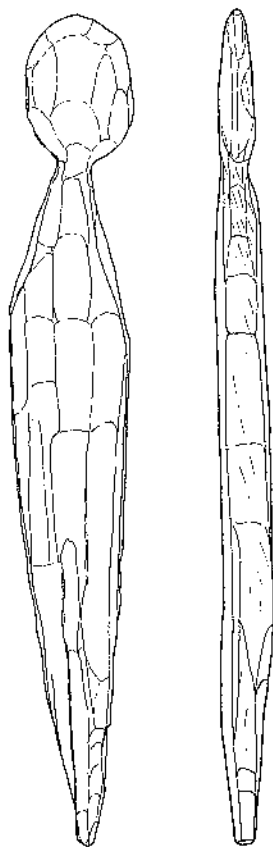
滋賀県内では湯ノ部遺跡で4体の木偶が出土したが、これ以外では大中の湖南遺跡から弥生時代中期の男女一对<sup>(7)</sup>と思われる2体の木偶が出土している。さらに草津市の烏丸崎遺跡では中期の方形周溝墓の周溝から1体の木偶が出土した。他府県の出土例では徳島県の庄遺跡<sup>(9)</sup>では弥生時代後期の溝から1体の木偶が出土し、大阪府の山賀遺跡<sup>(9)</sup>では前期の溝から木偶型が、加美遺



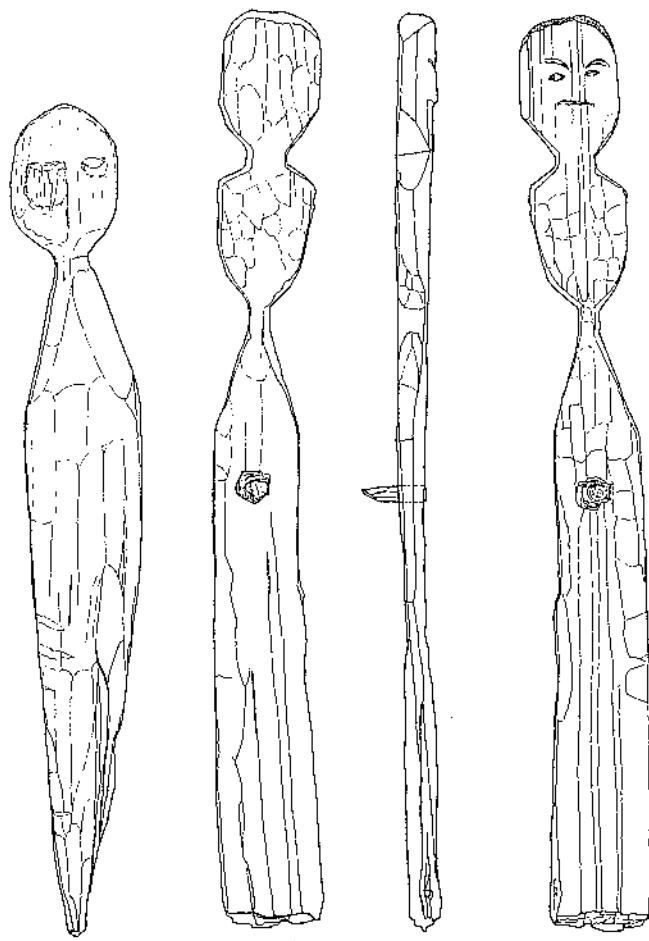
第1号木偶



第2号木偶



第3号木偶



第4号木偶

第3图 湯ノ部遺跡出土木偶 (S=1/5)

1. 2. 大中の湖南遺跡出土略図

(滋賀埋文ニュース、No.136より)

3. 烏丸崎遺跡出土実測図

(清水ひかる「第61回県埋文センター研究会」より)

S<sub>1</sub>1/5



第4図 県内出土の木偶

跡<sup>(1)</sup>では中期の方形周溝墓の周溝から出土した剣先型木製品が木偶ではないかとされている。また、愛知県朝日遺跡<sup>(2)</sup>では後期の人形木製品が1体出土している。

木偶は近畿地方中心の出土であるが、中部山地では木偶形容器と呼ばれる土製品が祖霊像とされる。中国四国地方ではこの時期分銅形土製品が流行する。そして九州では石偶がみられ、これらは地域的特徴とされる。

それでは木偶の形態について分類してその用途について考えてみたい。

その形態については頭部・胴部・腰部・脚部からなるものをAタイプとする。頭部・胴部・腰部からなるタイプをBとする。頭部・胴部と腰部の一体化したものをCとする。

また、末端部の成形形態から、先端が平らなものをI、杭状に尖らせたものをII、脚の付くものをIIIとする。

これらの出土例をまとめると次の様になる。



	A	B	C
I		湯ノ部 2、湯ノ部 4、大中 1	大中 2、庄、朝日
II		烏丸崎、山賀	湯ノ部 3、(加美)
III	湯ノ部 1		

この表からB Iの湯ノ部 2、4、大中 1は男性像ばかりである。B型の烏丸崎、山賀のタイプは男性像をイメージしたものであろうか。男女一対説を取るとC型は女性像をイメージしたものだ。しかし、男女が対でなく1体のみで出土したものは男女同一神とも考えられる。基部先端の加工形態は杭状となるII型は祭礼時には地中に差し込んで祭ったものであろうが、単独で出土するタイプは墓や、集落の入り口などに祀られていた可能性もあり検討を要する。

## 5. 木偶の祭祀

弥生時代の祭祀には多くの形態があるが、木偶の祭祀について考えてみたい。

弥生時代は本格的な稲作の農耕の開始により、春には豊饒を祝う祭り、秋には収穫を祝う祭り、現代の農村集落に残る春・秋の祭りと共通した形態の祭礼が行なわれたものと思う。また、弥生時代になると縄文時代の即物的信仰から抽象化した神＝偶像信仰への変化が考えられる。それは弥生人の精神生活が観念化し、空間的広がりを持ってきたことを意味する。

木偶に関する祭祀は多くの研究例<sup>(12)</sup>があるが、先例にならって中国の文献に依拠する。

ひとつは『魏書』東夷伝馬韓条である。

又諸国各有別邑、名之為蘇塗、立大木罍鈴鼓、事鬼神、諸亡逃至其中、皆不還之、好作賊、其立蘇塗之義、有似浮屠、而所行善惡有異

これは「馬韓には邑とは別に蘇塗と呼ばれる地が有り、大木を立てて鈴鼓を懸け、鬼神に事える。云々」

『魏書』東夷伝高句麗条では

好治宮室、於所居之左右立大家、祭鬼神、又祀靈星、社稷。

「宮室の左右に神殿を立て鬼神を祀り、又靈星と社稷を祀る。」

『周書』異域伝高麗条では

有神廟二所、一日夫余神、刻木作婦人之像、一日登高神、云是其始祖夫余神之子並置すなわち、「神殿に男女2体の像を作って、祀っている、云々」である。

これらの文献から、邑々には蘇塗と呼ばれる神聖な祭場があり、春と秋の予祝祭や収穫祭が行なわれる。祭には広場の大木には銅鐸が飾られ、周辺には鳥型木製品が掲げられる。日常は2つの神殿にそれぞれ一対ずつ祀られている鬼神＝木偶は、晴れの場に出され豊饒を願う人々の総体

としての祖霊神を宿す。湯ノ部遺跡出土の木偶はこうした祭礼の場で用いられたものであろう。

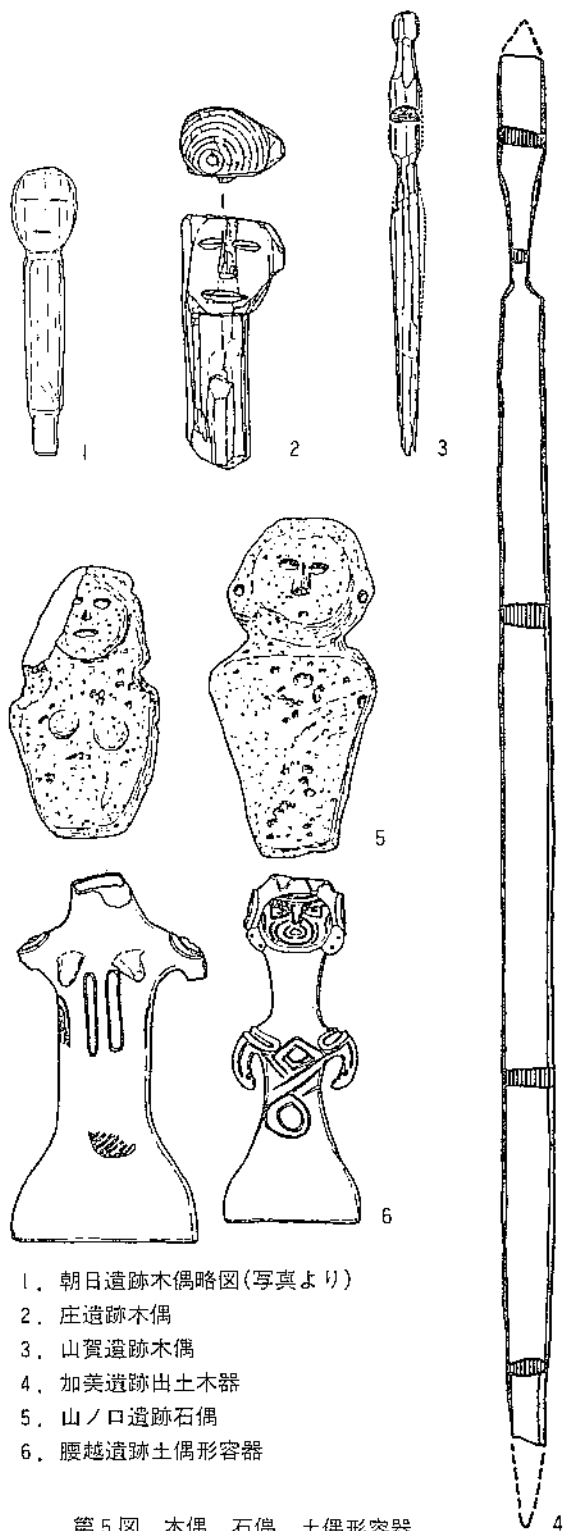
こうした祭場の情景は鳥取県稲吉遺跡出土の絵画土器<sup>(13)</sup>からも復元推定されている。

それでは、出土状況からみた木偶の祭祀について考えてみたい。

草津市の烏丸崎遺跡から出土した木偶は、半島に帯状に延びる100基以上ある方形周溝墓群の墓域の入口に近い部分の墓の周溝から出土したものである。調査担当の清水ひかる氏は木偶の出土した状況を、周溝内に土壙を形成しその土壙に木偶を埋納しいわゆる土壙内祭祀を行なったものであると推定されている。烏丸崎遺跡の木偶はB II型で、先端を尖らせて地中に突き刺すようにした形態だ。大阪の加美遺跡の剣先状木器が木偶と同様の機能を持つものだとすると方形周溝墓の周溝から出土したことや、先端が杭状に尖っている点、対にならずに単独で出土している点など共通点がみられる。このような木偶は祖霊神そのものの象徴として用いられたとも考えられる。烏丸崎型の木偶も本来は村落内で祭祀の道具として使われていたものであろうが、村落内の首長又はシャーマン的な存在が死亡すると壺や高坏などの供献土器とは別に死者に対する葬送の儀礼に使用されたものであろう。

湯ノ部遺跡の木偶は墓域に隣接した、集落の末端の祭場のような空間地帯を区画する周溝からの出土である。溝からの出土は烏丸崎遺跡、大中の湖南遺跡、庄遺跡等いずれも共通している。これは水分の多い溝が木製品が残りやすかったとも云えるが、木偶は最終的には周溝墓や集落の溝に埋納されたり、祭場にそのまま安置されたり、廃棄されたりした。

湯ノ部遺跡の木偶はいずれも溝の底から出



1. 朝日遺跡木偶略図(写真より)
2. 庄遺跡木偶
3. 山賀遺跡木偶
4. 加美遺跡出土木器
5. 山ノ口遺跡石偶
6. 腰越遺跡土偶形容器

第5図 木偶、石偶、土偶形容器

土した。とくに1、2号木偶は2体が並ぶように頭を東に向け、顔を下にして安置されていた。3号木偶は顔を上に向け水平に安置されて出土した。それに4号木偶は溝の底に水平におかれ頭を溝の外側に向け、顔を上にし、さらには腰部の穴には挿入された棒がそのままの状態出土した。こうした出土状況は集落外から流れこんだり投棄されたり、周辺から転落したものではなく、意図的に溝の底に安置したものである。さらに、墓や集落の溝に埋納することは本来の使命を終えた後も、2次的な使命を与えられたものと思われる。それは祖霊神や集落神=共同体の祭神に対する祭祀的なものである。

しかし、溝に埋納することが最終目的ではなく、集落内の「祭場」のような場所、又は墓域内の神聖な空間的な広場において、神の寄り代として収穫祭や予祝祭の場で使用されたものが、本来の使命を終えて溝に埋納されたものと思われる。こうした祭祀形態は銅鐸の祭祀にも(春成1982)共通する。

さらに4体がそれぞれ男女一対の関係であるとするば先にあげた『魏書』の2つの神殿にそれぞれ鬼神を祀ったとする記述にも抵触してくる。

今回の調査では明確に「祭場」と認識できる遺構の検出はなかった。現在発掘例では文献にみる典型的な祭場遺構<sup>(14)</sup>では男女一対の石偶が出土した鹿児島県山ノ口遺跡や、古墳時代になるが長野県石川条里遺跡等が考えられている。木偶が出土した溝SD2532に区画された高まりSX2504がこうした「祭場」的な役割を持った空間とも考えられ、祭礼が終了したあと使命を終えた木偶を埋納し、その時に使われた壺や、高坏などを溝に廃棄したものであろう。守山市の服部遺跡<sup>(15)</sup>では方形周溝墓群のなかに広場的な空間が存在する。報告では周溝墓の残地としているがこのような神聖な空間とも考えられる。

## 6. おわりに

今回湯ノ部遺跡出土の木偶に関連してこれまでに出土している県内外の出土資料から、木偶の祭祀について考えてみた。既に先学の方々が多くの検討をされているなかで、これまでの論点を整理したに過ぎない。主要には出土資料が少ない中で部分的にも資料を提供することで今後の調査研究の参考にしていただけたらと思う。

銅鐸などの青銅器に比べこれまであまり重要視されてこなかった木偶の祭祀は、弥生時代の祭祀を考えるうえで重要な要素を占めるだろう。近年弥生時代の大型の神殿遺構が検出されてきたが、其の神殿内の祭祀の中心は木偶であっただろう。

滋賀県は全国から出土する木偶の7割を占める地域的特色を持つ。今後更に発掘例は増加するものと思われるが、弥生時代の祭祀形態を考えるうえで重要なポイントとなろう。

今回の小稿は第61回滋賀県埋蔵文化財センター研究会「弥生時代のまつり—木偶をめぐる—」の事例報告の資料をもとにしたものである。当日講演された大阪府立弥生文化博物館の広瀬和雄氏の内容と当協会の清水ひかる氏の報告を多いに参考にさせていただいた。

## 註

- (1) 「湯ノ部遺跡出土の木偶について」他（『滋賀埋文ニュース』第141・145号 1992・1993年）
- (2) 「弥生時代の木偶が出土」（『滋賀埋文ニュース』第136号 1992年）
- (3) 『大中ノ湖南遺跡調査概要』滋賀県教育委員会 1967年
- (4) 『朝日遺跡』Ⅱ 愛知県教育委員会 1982年
- (5) 群馬県「上芝古墳」「塚廻り古墳」出土の埴輪など
- (6) 佐原真「三十四のキャンパス」（『考古学論考』 平凡社 1982年）
- (7) 金関恕「弥生時代の祭祀と稲作」（『考古学ジャーナル』No228 1984年）
- (8) 一山典、滝山雄一「徳島県庄遺跡出土の弥生時代木製品」（『考古学ジャーナル』No252 1985年）
- (9) 『山賀』その2 大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1983年
- (10) 田中清美「大阪府大阪市加美遺跡の調査」（『日本考古学年報37』日本考古学協会 1986年）
- (11) 『企画展 縄文から弥生へ』 名古屋市博物館 1993年  
愛知県埋蔵文化財センター『朝日遺跡』Ⅲ 1992年
- (12) 参考文献参照
- (13) 佐々木謙「鳥取県淀江町出土弥生式土器の原始絵画」（『考古学雑誌』第67巻第1号 1981年）
- (14) 「弥生の神々」（『大阪府立弥生文化博物館図録4』大阪府立弥生文化博物館 1992年）
- (15) 『服部遺跡発掘調査報告書』Ⅱ 滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・（勸）滋賀県文化財保護協会 1985年

## 参考文献

- ・横田健一『日本古代の精神』 講談社現代新書 1969年
- ・金関 恕「鳥を招く神々」（『考古学論考』 平凡社 1982年）  
「弥生時代の呪術と呪具」（『考古学研究』 1983年）  
「弥生時代の祭祀と稲作」（『考古学ジャーナル』No228 1984年）  
「弥生土器絵画における家屋の表現」（『国立歴史民俗資料館研究報告』第7集 1985年）  
「弥生時代の宗教」（『日本考古学論集』3 吉川弘文館 1986年）
- ・春成秀爾「銅鐸の時代」（『国立歴史民俗資料館研究報告』第1集 1982年）  
「銅鐸のまつり」（『国立歴史民俗資料館研究報告』第12集 1987年）  
「絵画から記号へ」（『国立歴史民俗資料館研究報告』第35集 1991年）
- ・工楽善通編「弥生人の造形」（『古代史復元』5 講談社 1989年）
- ・石川日出志編『弥生人とまつり』 六興出版 1990年
- ・設楽博己「弥生時代の農耕儀礼」（『季刊考古学』第37号 1991年）
- ・鳥越憲三郎『古代朝鮮と倭族』 中公新書 1992年
- ・辰巳和弘『埴輪の絵画と古代学』 白水社 1992年
- ・大阪府立弥生文化博物館「弥生の神々」（『大阪府立弥生文化博物館図録4』1992年）

編集後記

今年の『紀要』は例年になく原稿の集まりが早かった。これも偏に各執筆者の日々の精進の賜物か。

今後も、洛陽の梓価を高めるような『紀要』であり続けたい。

編集者

平成5年3月 初版  
平成6年3月 2刷

紀 要 第 6 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel(0775)48-9780・9781

印 刷 宮川印刷株式会社  
大津市富士見台3番18号  
Tel(0775)33-1241